

両荘散策

歩いてまわれるコースで名所旧跡
を紹介する散策シリーズ。
里山や田園に囲まれた自然あふれ
る「両荘周辺散策コース」。
加古川再発見に、さあ、出発！

報恩寺の鬼追い

県道平荘・市場線

みとろ
観光果樹園

みとろ
フルーツパーク

長池の観察小屋

都染の清水

上之庄神社

加古川温泉
みとろ荘

みとろ苑

平之荘神社

両荘公民館

両荘中学校

見土呂の
石仏

長慶寺山古墳

旧街道

主要地方道 神戸・加古川・姫路線

石棺 上之庄小学校

加古川

平之荘神社の秋祭り

古い街並み

上之庄神社

コース 所用時間 2時間49分・11.3km

両荘公民館

2.7km
40分

みとろ荘

1.0km
15分

みとろ
フルーツパーク

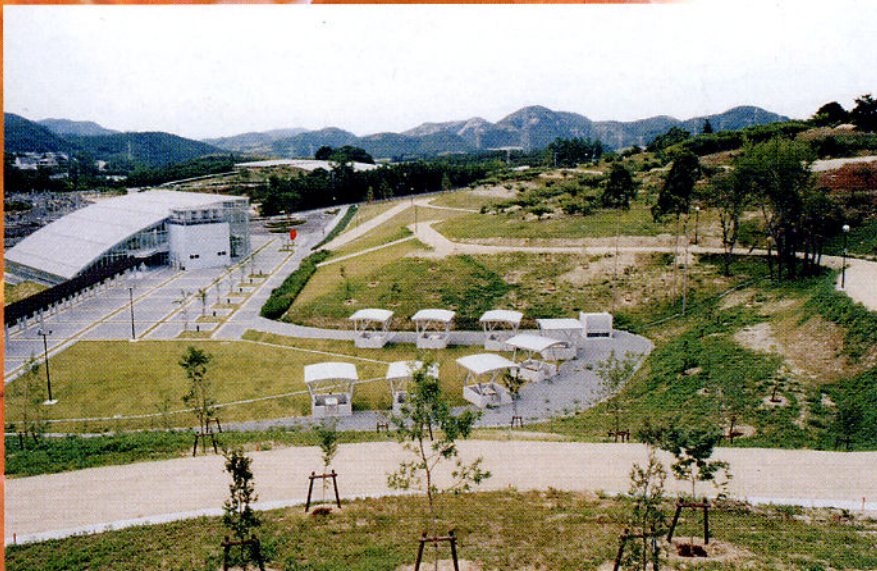
4.2km
63分

長池
観察広場

3.4km
51分

両荘公民館

両 荘 散 策



芝の天神さん

仁明天皇の845年頃、芝村の医者の子できくのといふ人がいました。京都の知人をたよって、藤原兼良郷の家へ奉公にあり大変かわいがられました。お嫁に行く年頃になったので、おひまをいただき結婚し、男の子が生まれました。夫婦で大事に育てていましたが、かぜがもとで亡くなってしまいました。そして、夫も後を追うように亡くなってしまいました。生きる希望もなくさびしく暮らしているちょうどその頃、菅原は善卿(スガワラコレヨシキョウ) 夫婦に男の子が生まれ、乳母をさがしておられました。ある人のすすめできくのが善卿のところへあがることになりました。その若君が道真公(ミチザネコウ)です。それからのちずっと道真公をお守りしました。道真公が8歳になられた時、乳母のきくのはおひまをいただき、故郷の芝村へ帰り、のんびりと暮らしていました。

道真公はだんだん位が高くなられ、道真公が57歳の時道真公が偉くなるのをうらやんだ藤原時平が、道真公を落としたい、道真公は筑紫の太宰府へ流されることになりました。

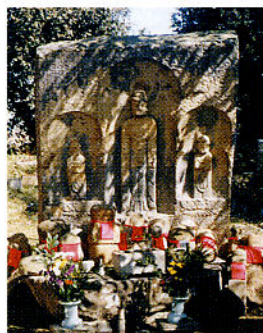
都をあとに船で播磨灘にさしかかった時、にわかに海が荒れて船が沈みかかりましたが、やっと別府(加古川市)の浜に上陸されました。そこで、ふと乳母のことを思い出され、「私が小さい時に乳をもらった乳母は、加古川の芝村というところの者だが、ぜひ会いたい。もう生きてはいないかも知れないが、せめて乳母の住んだあとだけでもたずねてみたい。」といわれ芝村にいかれました。そして2人は会うことができ2人の喜びは言うまでもなく、長い話がつきませんでした。別れぎわに道真公はきくに、「もう二度と会うことはないでしょう。」といってつぎのような歌をおよみになりました。

「ながらへて ありとも我は おもはじな 逢見るそこそつきぬ奇縁ぞ」 きくのは、この短冊を道真公と見て大切にしていました。きくのが亡くなり、道真公の短冊をご神体として、きくのが住んでいた場所に天神の社を建て、村を守る神様としておまつりするようになりました。そののち芝村には、雷が落ちたり火事がおきたりする心配は無いといわれています。

みとろフルーツパーク

クリスタルアーチ(ガラス張りの温室)にはカカオ、マンゴー、コーヒー等の熱帯果樹と観葉植物約3800本が植えられており、室温は常に25度以上に保たれ、年中南国気分が味わえます。このほかにも、明石海峡大橋まで見渡せる展望台、木製のジャングルジム、バーベキューガーデン(予約が必要)、野菜の収穫が体験できる観光農園があり、自然に親しむことができる施設です。

また、みとろ観光果樹園とウォーキングセンターが隣接しており、一日をゆっくり過ごすことができます。



見土呂の石仏

室町時代のはじめ、当地の井口城が赤松則村のとりでとして築かれました。井口城には美しく心やさしい美登呂姫がおられました。家来の一青年が美登呂姫を見入り機を見て近寄ろうとしていました。ある年の「月見の祝」の席で姫に近寄ることができた青年は、姫への思いをうちあげましたが、姫は青年の申し出を拒みしました。腹のたつた青年は、姫を切り殺し裏山に埋めてしまいました。村の人々はとても残念がり、石仏をつくってまつりました。見土呂の地名は、美登呂姫からきているといわれています。



長池



すもも

6月20日頃～7月20日頃
(600円)

みとろ観光果樹園

栗

9月1日～10月10日頃
(1,000円 栗800gのおみやげ付)

ぶどう

8月1日～9月20日頃(大人800円・小人600円)
(料金、期間等は変更される場合があります。)



井ノ口の清水

今から1200年ほど前、元明天皇は奈良に都を定められ、新しい国づくりに取りかかれました。天皇は女帝でありましたから、官衣のつくり方についてもいろいろと心をくだかれましたが、官衣の染色になって困ってしまいました。それは思いどおりに藍色が出ないのです。そんなとき「播磨の国、印南の堤というところに、たいへん良い水の出る場所がある。」という神のお告げを聞かれました。さっそく、天皇の命をうけた家来が播磨の国の教えられたところへやってきました。すると山のふもとに、清水の湧き出ているところがありました。その清水を都へ持ち帰り衣を染めてみると、あざやかな色に染めあがりました。天皇はたいへんおよろこびになり、

「あいにあう 井の口の清水なかりせば 都の衣 いかに染めなん」と歌われました。

「都染」の地名は「都染(みやこそめ)」からきているといわれています。都染には、それ以後、染物を家業とする家が出来て、江戸時代末期まで続き今も「紺屋」とか「紺屋」という屋号の家が残っていて、その家には染物に使った形紙や壺があるということです。

